第66回 書道同文展

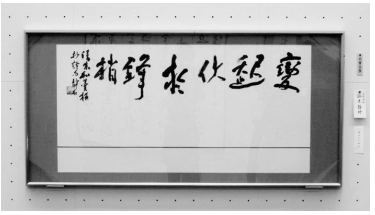
会期　六月二十一日～二十六日
会場　上野　東京都美術館

書道同文会第六十六回展が都美術館のリニューアルされ三年目の明るい会場で今年も開催されました。第一室では、書莚会会長・同文会名誉会長鈴木静村先生の「臨池心解一節」にふれ、揺るぎない筆線の中から心温まる筆意を感じ感動いたしました。

書莚会主幹で同文会参与髙橋香樹先生の力強い素晴らしい大作を始め、書莚会でご活躍の先生方は四曲作品が多く会場を圧する迫力で見応えを感じました。「漢字仮名交じり書」については二、三年前より研究会を開き研修を重ね、同文会の方向性を捉えた独自の書として、今展より新部門「同文新書」の名称で発足いたしました。読める書をモットーとしてこれからも「新書」への挑戦を期待しております。又今回は「学生展」を併催、半切・字自由、小学生から大学生迄出品点数は約一九〇点もあり、学生書莚で活躍されている生徒が多く見受けられ将来に繋がることを願っています。地方からも子供達がご父母と久し振りに東京（上野）に来観され、都美術館の広くて立派な会場に出品出来た事を後日楽しく話してくれました。二十二日は席上揮毫が行われ飯原青洲会長、立川遊汀副会長他「同文新書」の水貝潮華、宮絢子両先生、杉浦羅雪さんの特徴ある筆鋒、リズム、余白等にふれ有意義な時を過すことが出来、大変盛会でした。

今年の受賞者の準会員に対する賞は、文部科学大臣賞、松林藍汀さん、高塚竹堂賞、渡邊遒華さんをはじめ、会友・一般に対する賞も書莚関係者が多く日頃書莚誌で習練努力された賜物と嬉しく思いました。皆様益々研鑽され同文展に挑戦して下さい。

（外川霞夕）

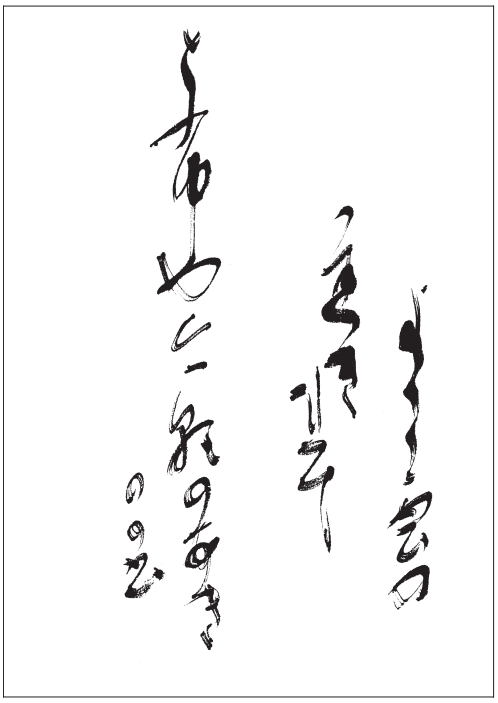


鈴木静村

半紙課題（予告）　（十月二十二日締切）

平岡華雪先生書　任重く而（しかし）て道遠し。（論語）

訳…責任は重く、しかも道程は遠い。道義をになう者の覚悟をいう。



平岡華雪先生書　横雲のちぎれて飛ぶや今朝の秋（北枝）

昇試第一部漢字課題　（九月二十日締切）

A

鈴木静村書

飛花不盡隨風起　野水無邊帶雨流（曾鞏）

飛花尽きず風に随って起こり、野水無辺雨を帯びて流る。

使用雅印は髙橋香樹主幹に彫っていただいたもの。私は署名を含めた周辺の筆意を観て、印を決めているが、今回は二行目の書線、特に署名に即したこの雅印で締めてみた。本文は行書を主調に単体表現。「風」に対応した草書体を配慮すると、上半部が明るく正気化されると思う。各自の〝力〟を見せてほしい。

B

髙橋香樹主幹書

草書は「風」だけで連綿なしの行書単体による作。「飛」は縦画を中央に寄せる。「盡」の烈火は横一画で、「隨」の之繞は「邊」の之繞と変える為、右下に傾斜。「邊帯」は見せ場。「帯」の末画厳しくスッキリと。二行目は「飛盡隨」で、二行目は「無邊流」で幅を取る。墨継ぎは「風」と「邊」。

訳…風が吹くたびに花が落ち、広々とした野の水が雨と共に増してくる。

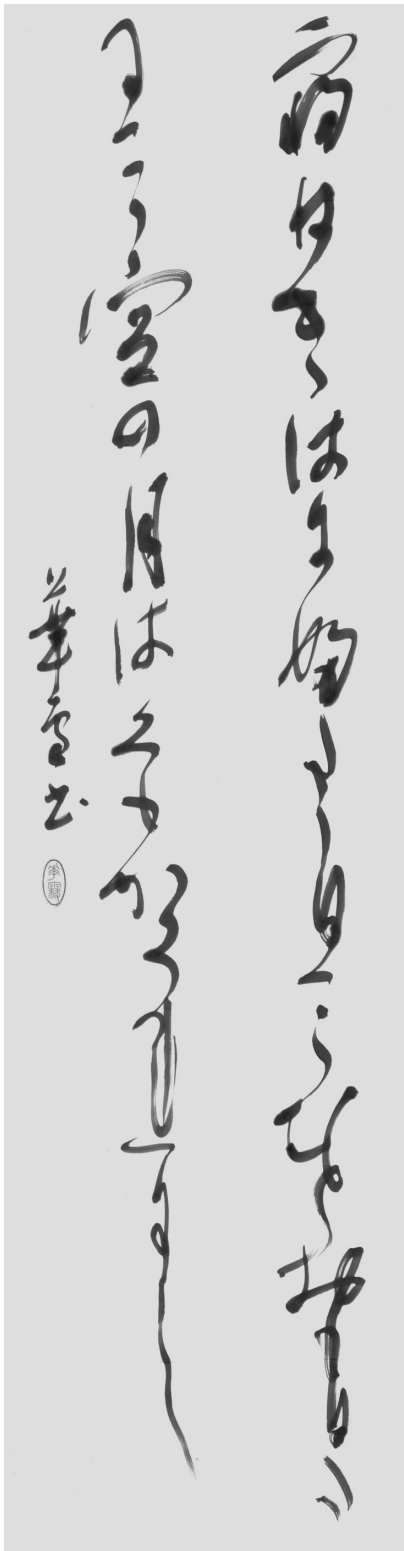
予告（十月二十二日締切）　**蘭在幽林亦自香**（劉禹錫）

◆注意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第一部かな課題　（九月二十日締切）

A

平岡華雪先生書



寝ねぎはにふたたび見むとおもひたるみ空の月は雲がくれにし（土田耕平）
寝ねきは尓婦多丶日三むとおも日多る三空の月は久もか久連尓し

B

福田玉翔先生書

寝ね支者耳ふ多丶ひ見無とお母ひ堂る三空の月盤雲かくれ二し

土田耕平（明38～大15）この歌は「青杉」に収められている。島木赤彦の門下となり、「アララギ」の編集に参加。大正四年から十年まで病気のため伊豆大島に転地療養す。その期間の作品を集めたのが「青杉」（大正十一年刊）である。

学び方

今回は私の担当の最終回ですので、ちょっと変わった構成にしました。上下二段に散らしましたが、半切では一般的ではありません。

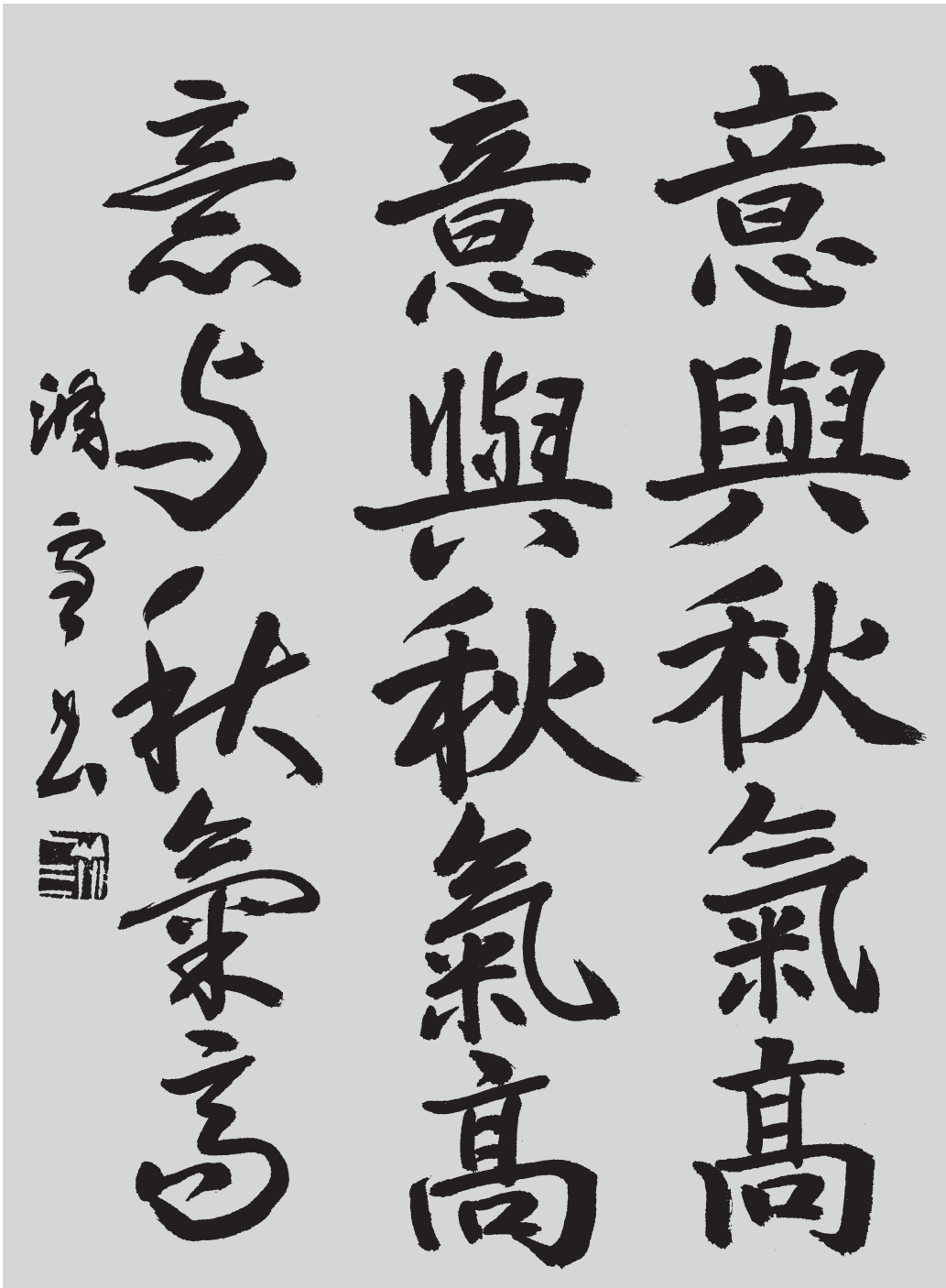
十五世紀前半の後奈良天皇の消息（手紙）に不思議な構成のものが残されています。どこからどのように読むのか、読む人が推理しなくてはなりません。出だしは紙の中央にあり、右下・右上・左上と移っていきます。意味を考えながら読まないと理解できません。全体を眺めたときの視覚的な美を追求したものと思います。墨量の変化や線の強弱など、現代の散らし書き作品の基になったのだろうと想像できます。散らし書きこそが仮名作品の真骨頂と言えます。

予告（十月二十二日締切）　**白雲に羽うちかはしとぶ雁のかずさへ見ゆる秋のよの月**（古今和歌集）

◆**注 意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第二部漢字課題　（九月二十日締切）

加藤洞雪先生書



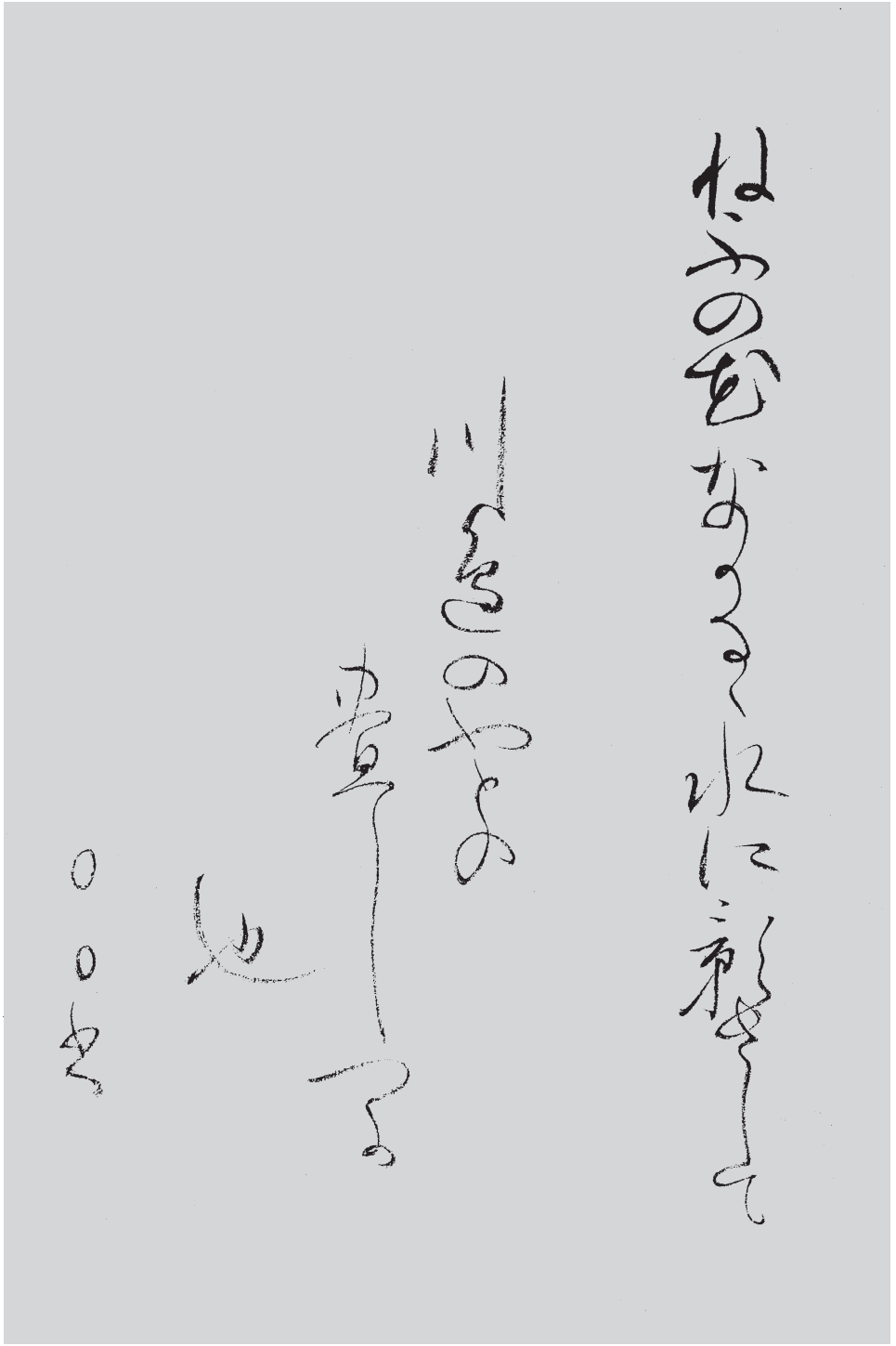
意與秋氣高（蘇軾）
意秋気（いしゅうき）と高（たか）し。

訳…その人柄は秋気の如く清くして高い。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第二部かな課題　（九月二十日締切）

高塚竹堂先生書



ねぶの花流るる水に影さして川辺のやどの昼しづかなり

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第三部漢字課題　（九月二十日締切）

平岡華雪先生書

仁義以って人を利す。

訳…利は益、仁義によって人を益し、（忠信によって人をみちびく。）

〈基礎用筆に習熟を〉

「仁・利・人」の一画目、「義」の二画目の入筆に留意して下さい。これは、左方向から入り、一旦止めて、バネで左下方に、引っ掻く用筆です。基礎用筆の一つ。ぜひ、練習して会得して下さい。

◆**注 意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

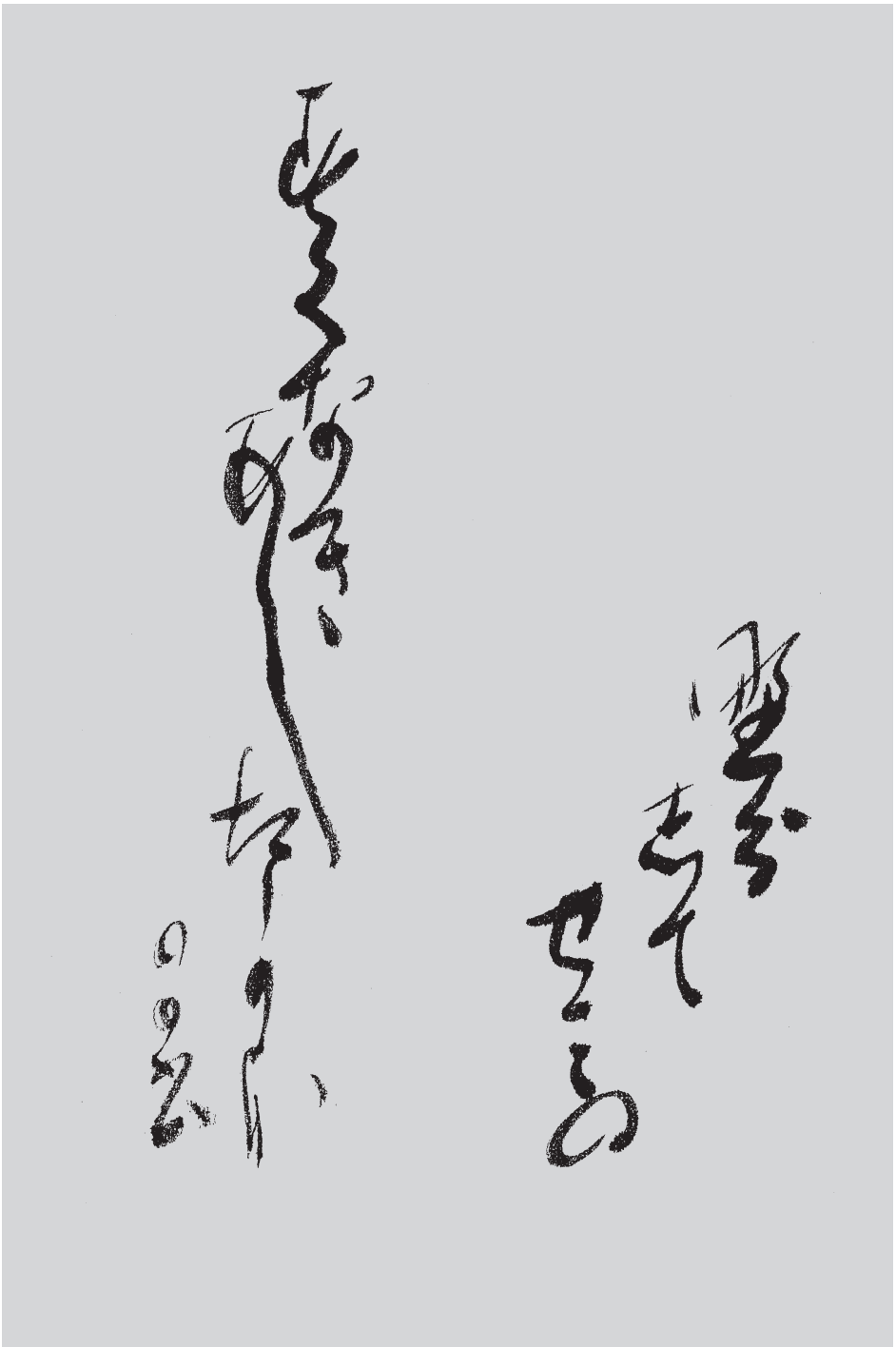
昇試第三部かな課題　（九月二十日締切）

平岡華雪先生書

野分して蟬の少なきあした哉（子規）
野分志てせ三の春久なきあした可那

〈表出に工夫を〉
散らし構成から、右群は三段階の漢字二字、かな二字、かな三字それぞれの特徴を生かした変化を考えたい。左群は〝寄せ〟の二行にプラス〝落款〟。「あし」で墨つぎ、潤渇・太細等による変化を工夫して効果的に。

○変体がなの単体練習



◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

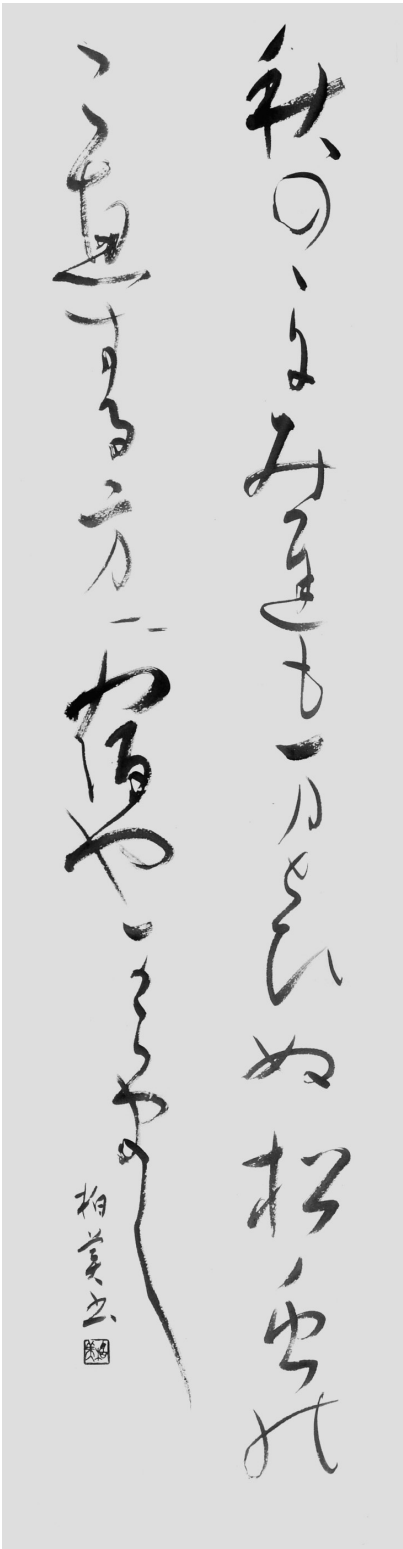
酒井香雨先生書

亂鴉背著斜陽去　寒雁帶秋色將來（田紫芝）

乱鴉背に斜陽を著けて去り、寒雁秋色を帯び将て来る。

訳…乱れ飛ぶ鴉の背には夕日がさして塒に帰るのを送り、寒げに鳴く雁は秋のけはいをはこんで飛び来らんとする。

石島柏美先生書



秋の野に道もまどひぬ松虫の声する方に宿やからまし（古今和歌集　よみ人しらず）

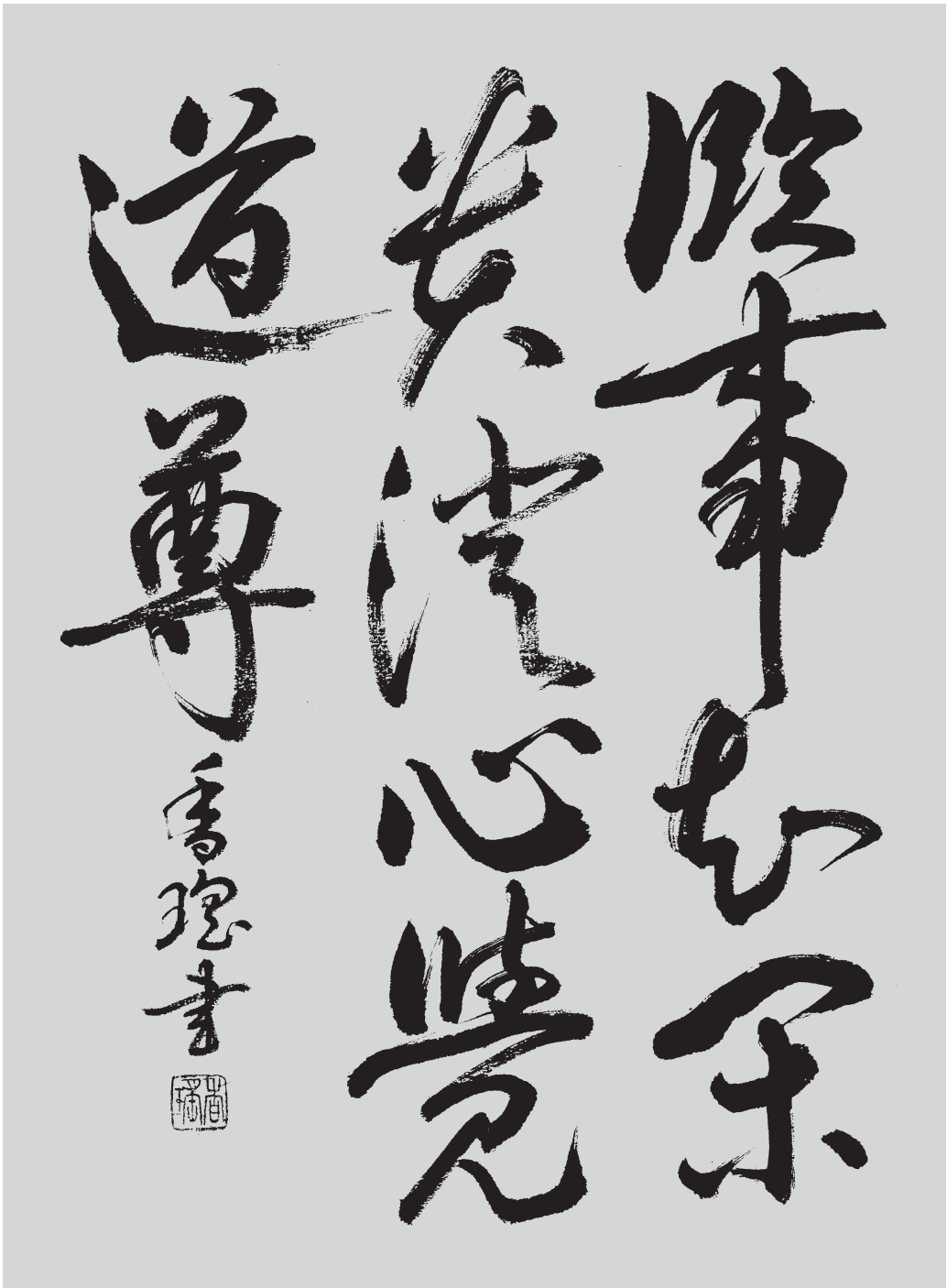
秋の、尓み遅も万とひぬ松虫能こ恵する方二宿や可ら末し

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

内藤香瑶先生書

臨事知閑貴　澄心覺道尊（魏野）

事に臨んで閑の貴きを知り、心を澄して道の尊きを覚ゆ。



訳…物事あるに際しては清閑の貴きが知られる。道の尊さは我欲なく心をすます時に知られる。

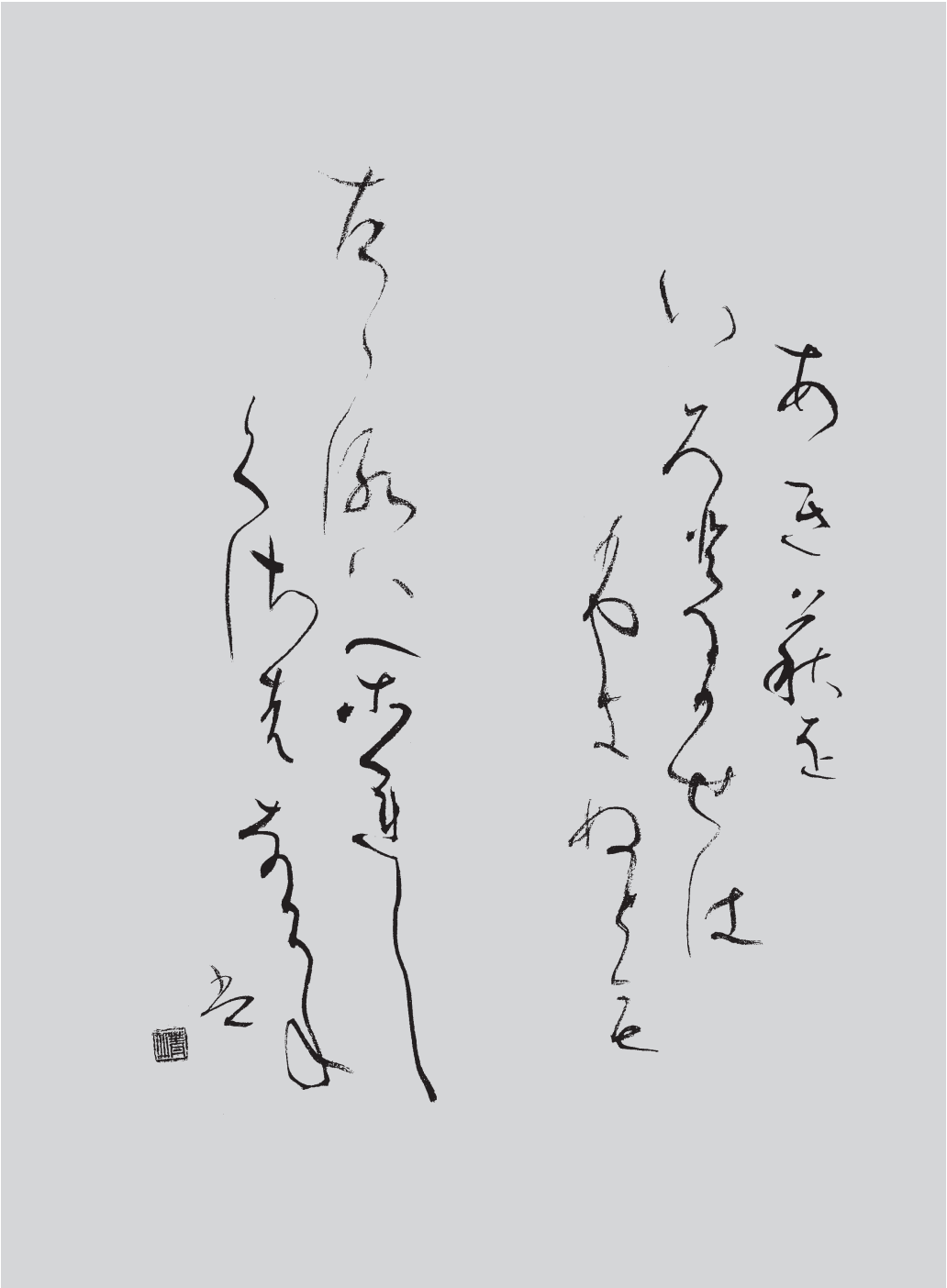
◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇　試　随　意　参　考

北島菁丘先生書

秋萩をいろどる風はふきぬとも心はかれじ草葉ならねば（後撰和歌集　在原業平）

あき萩をいろ登る可せは布支ぬと毛故丶路八閑連し久佐者奈ら年盤



左余白に落款「〇〇書」と調和を工夫し書き入れる事。

◆**注　意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

硬筆部課題参考　（九月二十日締切）

路川千曄先生書

課題 1　（初段以上）

月夜、河岸の湯にひたっていると、
大きい樹木の裏葉を淡白く透かせて
見せる月が葉の隙間から光りの布を
幾すじも湯の上に投げ下ろしている。

湯澤春翠先生書

課題 2　（初段格以下）

季節が移り変わるように
茜雲が流れていく
のぞき色の空にかかる月は花筏

課題1（初段以上）

月夜、河岸の湯にひたっていると、大きい樹木の裏葉を淡白く透かせて見せる月が葉の隙間から光りの布を幾すじも湯の上に投げ下ろしている。

「伊豆の旅」川端康成

◆注意

(1) 自分の段級に合った課題を選択。

(2) ペンまたはボールペン（黒色）を使用のこと。青インクは不可。

(3) 段級欄は本人が記入（色は黒）はじめて出品される方は私製の紙（3×4㎝位に）次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新

(4) 会員は無料・会員外は四三〇円

(5)

課題2（初段格以下）

季節が移り変わるように
茜雲（あかねぐも）が流れていく
のぞき色の空にかかる月は花筏（はないかだ）

「星の島」　林完次

のぞき色…藍染の伝統的な淡い青色。瓶覗（かめのぞき）とも。